

神様のプレゼントとそれに伴う味の変化

仁愛女子高等学校

三浦 理恵子

「神様がくれたお休みだと思ってゆっくりしてなさい。」

受験生の秋、それは、苦手を克服するでもよし、基礎を固めるでもよし、センター対策をするでもよし。つまり、勉強に明け暮れるべき季節であると思はれる。そんな中、私は病気がかかった。手術が必要なほど大きな病気ならあきらめもついただろうが、薬を飲んで2週間ほど休めばいいという、なんともどこかしい感じだった。母は冒頭のように私に言うけれど、正直言つて私にはあせりしかなかった。皆が勉強している間、こんなことで大丈夫なのだろうか、と。神様のプレゼントの割には、痛手でしかないなあ、と思っていた。

私には、同居している祖母がいる。働いてはおらず、家の家事を担当している。私は祖母の作る料理があまり好きではなかった。理由は単純、おいしくないのだ。祖母のいない日に仕事から帰ってきた母が、たまに急いで作る料理よりも、毎日家でゆっくりしている祖母の方が料理がまずいという事実も、なんだか気に入らなかった。朝早く家を出て、夕方日が沈むころに帰る私の目に映る祖母の姿は、洗物を母に押し付け、自分はすぐに自室にこもつて韓国ドラマを視ている姿だけだった。そんな怠惰なように見える姿は、私をイライラさせ、より祖母の料理をまずくさせていた。

そんな毎日が続く中訪れた、「神様のプレゼント」という名の強制休日。ベットの上でできる勉強は私の嫌いな暗記物しかなく、なんとなく集中力も続かなかった。休憩がてら祖母を観察してみることにした。観察と言っても、祖母の後ろをついて回るようなことはせず、ただ、その足音やそれに付随する物音に耳を澄ませるのが主だ。

朝、祖母起床。顔を洗い、朝ごはんの前にごみを捨ててに行く。その後、朝食をとり、一息つくと、掃除を始める。掃除機をかける音しか聞こえなかったけれど、クイックルワイパーも使っていた。(私の部屋を掃除しに来た時に持っていたので分かった。)洗顔ついでにボタンを押していたであろう洗濯機の洗濯完了の音が鳴り、祖母は洗濯物を干す。(家族五人分、結構な量だ。)あっという間にお昼になり、昼食の準備にとりかかる。簡単な昼食を済ませたであろう祖母は、今度はスパーへ買い物に行くと私に告げて、出かけて行った。一時過ぎだったと思う。その後帰宅し、買ってきたものを冷蔵庫に詰めて、物音が途絶える。おそらく休憩していたのだろう。三時ごろだろうか、洗濯物を取り込んでいるのがわかった。少し日が傾き始めた四時過ぎ、今度は公園に歩きに行くと言ってまた出かけて行った。祖母は健康のために毎日歩いているのだ。三十分ほどして、帰ってくると、シャワーを浴びる音が聞こえてきた。そして、夕食の準備に取り掛かった。後は、夕食を食

べて、いつもの祖母の様子だった。

なんてことだろう。怠惰だと思っていた祖母は、実は働き者だったのだ。私たちがいない間もずっと、テレビを見ているのだろうと勝手に思っていた私には、午前の時点ですでに驚きだった。一日を見るとなおさら驚いた。こんなにも、祖母は私たちのために働いていたのだ。外に勤めに行つたことがない祖母を、「社会を知らない」と、どこか馬鹿にしていた私だったが、身近な「家」を知らない私の方が馬鹿に思えた。家事も立派な仕事であつて、その家事五人分を一身に引き受けている祖母もまた立派に見えた。祖母と同居して、七年、私はやっと祖母のはたらきを理解したのだ。

「神様のプレゼント」と言つた母は、働き者で、たまに祖母が不在の時には家事までこなす母を私は尊敬していた。しかし、残念なことに、今まで祖母を尊敬したことはなかった。私は未熟で、目に見えるものしか考慮に入れずに、祖母を決めつけていたのだ。受験が近づき、周りを見る余裕がなくなり、受験を終えたころには県外に出るつもりだった私は、この休みがなければ、ずっと祖母を誤解したままであつただろう。そう思うと、確かにこの休暇は神様がくれたもの、と捉えてもいいかもしれない。でもそれは、母が意味するような「体を休めるための休暇」ではなく、「祖母を理解するための休暇」ではないかと思う。勉強ばかりだった私が大切なものに気付くための。相手を理解するうえで、目に見えるもの以外も考慮に入れて初めて相手を理解できるという教訓。それを私に与えるために。

余談だが、その後の祖母のごはんはいままでよりちよっぴり美味しく感じられた。ごめんね、おばあちゃん。ありがとう、神様。おばあちゃん、ありがとう。